

# 風土記の花だより300

今、そしてこれから見られる植物 (2025年12月13日)

この花だよりは、読んでくださる皆様のおかげで300号に達しました。ありがとうございます。とはいえ、いつもどおりの変わり映えしない300号で恐縮です。いつも申しておりますように、この時期花を探すのが大変で、栄えある300号には一輪の花もなく、華やかさを欠いています。



さっそく1つ目から枯れ葉です。これはクスノキ科のヤマコウバシという木の葉です。この色ですから、すでに枯れています。でも木に付いたままで落ちていません。そろそろ受験シーズンですが、この落ちない葉にあやかって、これを受験のお守りにするのが、ちょっとしたブームなんだそうです。万葉植物園のほぼ真ん中に大きな木があります。小早川住宅の南の石垣にも小さな木があります。よかったら、受験のお守りにいかがですか？でも、受験の可否は、ご本人の努力次第だと思いますよ。



前の花だよりでチラっと紹介したマサキの実です。左は船屋の南で撮ったもので、実が割れて中から赤い種子が出ている様子です。また、右は大駐車場の南の植え込みで撮ったものです。まるでマユミの実のように紅色に色づいていますが、まだ割れていません。木による個体差なのでしょうか、それとも品種が違うのでしょうか、よく分かりませんが、どちらもとても愛くるしいですね。マサキは雌雄異株といって、オスとメスがあり、メスの木に実がなります。



「難を転ずる」ので、縁起のいい木として知られているナンテン（難転）の赤い実がきれいです。古い家では今でも鬼門さんにこの木を植えていることが多いですね。（鬼門さんと言っても、ご存じの方はどれくらいおられるでしょう？）昔は生ものを贈る時にナンテンの葉を添えたり、雪でうさぎを作ったら、この実を目にしたりと、人との関わりの深い木でしたが、そんなことも今となっては昔の事、いつか忘れ去られるのでしょうか。残したい日本の文化ですけどね



真っ赤に色づいた葉が散ってしまい、ハゼノキにはこんな実が垂れ下がっているだけになりました。ヤマハゼもたまに、見かけますが、風土記の丘周辺で見られるハゼノキはリュウキュウハゼと呼ばれるものが多く、かつてはこの実の果皮から蠟（ろう）をとるためによく栽培されていました。この木にも雌雄があり、実はメスの木になります。野鳥もこの実が大好きで、ついばんでいる姿をよく見かけます。消化されずに糞と一緒に出てきた種子が、子どもがよく拾う「狐の小判」です。ご存じでしたか？

松下